第 2014-37 号

恵みと真理のニュース

2014 年 9 月の二次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養 5 洞 458-5 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］ 主の事を喜びで担え、叫ぶ祈るごとに神様が答えてくださいました

信仰が弱くて主の事に戦力をつけない状況である日、金曜日の聖歌隊の隊長の重責を担えました。聖歌隊員としても最善を尽くさなかったし、隊員にも面目がないのに聖歌隊長はあまりにも過重な責任でした。担えられなくて、自信がなくて私より信仰生活の年輪が深い方達に心を話しましたらみんな同じ 話をしました。
“執事、執事がまじめで忠誠したから尊い職分をくださった神様に感謝を捧げ、今よりもっと祈りなさい。神様は仕える職分を与える時には担える力も与えてくださいます。まず、主を考え主の心で奉仕すると主と時によって助ける恵みをくださいます。”それで、従順して祈るなかで“わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です。”（フィリピ信徒への手紙４：１３）
わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。（コリント信徒への手紙一 15:58）
“彼は答えて、わたしに言った。「これがゼルバベルに向けられた主の言葉である。武力によらず、権力によらず／ただわが霊によって、と万軍の主は言われる。（ザカリヤ　4：6）という御言葉に委ねて大胆に聖歌隊長の職務を担えました。聖霊で満たされるように祈りをして目標を新たに決めて熱心に神様に祈りました。
金曜日になると午前にはイルサンで礼拝を捧げた後、カンミョンの店に行き急いで仕事を終わらせて、またイルサン聖殿に行き聖歌隊の奉仕をするきつい日程でしたが隊員より遅くならないように努力をしました。遅い時間にお客さんが来ると仕方なく退勤が遅くなり聖歌隊の練習と礼拝時間に遅くなるか不安な心で切に祈りました。金曜日の退勤の道はいつも混んでいます。しかし、神様に祈ると珍しいが教会に向かう道はあまり混まなくて時間に間に合いました。聖歌隊員が全ての練習に疎かにしなくて熱心な心を持ち、賛美を捧げる時にいつも主の前で真の賛美を捧げるようにお祈りしました。また、隊員の生業と家庭に祝福を与えて下さり、余裕を持って奉仕するように祈りました。
祈りを聞いてくださる神様のたすけて聖歌隊員の心を一つにして愛を持って献身と奉仕しました。私が負かられた事に最善を尽くすうちに神さんは私の家庭にも満ち溢れるように満たしてくださいました。
様々な事で忙しい中でも祈る時には新しい家を作る願いができて求めながら祈りました。引越しる計画もなく経済的にも余裕もなかったので祈りながらも心では奇問でした。何日後知ったことは神様は私に新しい家を与えるためその願を持って祈るようにしたことを悟りました。
新しい家を営む前私の舅が重病にかかて六ヶ月間しか生きれない宣告を受けました。家族みんな前が見えなかったです。旦那は長男で父親を仕えるべきでしたがその状況になれなくて姉の家で仕えるようになりました。私は長男の嫁として舅を仕えられない罪責感と責任感で病院と姉の家を行き来しながら最善を尽くしました。 舅がこれから生きる時間があまり残ってないが、苦痛なく安らかに死を待つように祈り教区長、様々な聖徒達に祈りを願いました。良い神様は答えてくださり、最後の日まで大きい痛みもなく平安に天国に行きました。葬式も神様の恵みでよく終わることができました。
新しい家のため希望を与えて下さり祈りをして、神様の摂理と助けでインチョンに引越しするようになり以前よりもっと良い状況で一人で残った母を仕えることができました。舅を仕えなかったことが申し訳なかったですが、老眼で床についている母を熱心に仕えることができて心の慰めになった。
母の介護で今は聖歌隊長の重責を担えないのが惜しいですが、その代わり礼拝と祈り会に休まずに参席して教会で一つの区域をあずけられ熱心に区域を守り伝道に最善を尽くしています。見知らぬところに引越しましたがここでも恵みと真理教会があってと信仰と愛が深い聖徒達がいて共に頑張って伝道し仕えることが出来て神様に真の感謝を捧げます。享年 2011 年夏、田園聖殿で一泊二日の夏断食祈り聖会のときでした。どうしてもいけない状況でしたが、全ての事が止めて聖会に参席しました。聖会の前から具体的に祈りの課題を整理し、行くバスの中で神様の助けで解決される祈り課題をまず解決できる順序を決めました。初めの日は聖霊に満たされる恵みを受け翌日の朝から聖殿で切ない心で祈る時でした。普通は他の人に誇るほど健康でしたが祈りをする時に全身が痛くて特に腰が痛くて起きれないくらいでした。珍しい事でした。もう再び座ってしまって“死んだら死ぬ”という心で残って祈りました。そして礼拝が始まる頃珍しく、全ての体と心が平安になり祈ったとおりすべての祈った事が成し溶けられる確信ができました。
その時祈り課題は　１）父が苦痛なく天国に行くこと、２）金曜日の聖歌隊が大きくリバイバルされるように３）教会で任された職分を知恵と謙遜で担えるように４）子供が大学に入学するように　５）事業が日々良くなるように　６）借金を早く返すように７）区域礼拝をよく捧げ、母を仕える新しい家を持つように　ということでした。今考えてみると、私の全ての願と期待が成し遂げられつづけて成し遂げられています。
“ わたしを呼べ。わたしはあなたに答え、あなたの知らない隠された大いなることを告げ知らせる。”（エレミヤ　３３：３）この約束の御言葉のとおりに成し遂げる真の神様に栄光を捧げます。栄光と賛美を捧げます。ハレルヤ！
祈って答えられる楽しみを享受しながら私に新しいビジョンができました。私達の教会の目標をなしとけることにもっと多く深く参加して献身する決心をしました。引越しするころ訪問してきた大教区長の牧師にこれからの私の計画手希望を話したら“主に自らをゆだねよ／主はあなたの心の願いをかなえてくださる。”(詩篇　37：4)という御言葉で励みと祝福もしました。“人間の心は自分の道を計画する。主が一歩一歩を備えてくださる。”(箴言：１６：９)といった御言葉を強く信じ、ビジョンを持って祈りし今日もこれからも前に向かいます。

［信仰コラム］ 御霊を消してはいけない

″御霊を消してはいけない″(テサロニケ人への第一の手紙,5:19)

″御霊を消してはいけない″と言うお言葉を理解しようとすれば聖霊に対する知識と体験がなければなりません．聖霊に対する無知や誤解は信仰向上と進歩に大きい障害になって神様がくださる幸せと恵みを享受するのにひどい差し支えをもたらします．先に，聖霊様は誰かに対して聖書に啓示されたお言葉を通じてよく見ます．聖書に啓示された神様は三位一体である神様です．聖父は創造して聖子はあがないして聖霊様は聖なるようにします．三位の神様は一つの旨で協力するから真の意味で三位は一体です．人間を救いしようとする聖父の計画が聖子にとって人間の身を着てイエスキリストという名前で世の中へいらっしゃるようにしたし，イエスキリストが成したあがないの恩寵を神様の霊でイエスキリストの霊である聖霊が信者たちに分けて下さいます．人々に聖父の神様は聖子イエス様を知らせました．聖子イエスキリストは聖父神様を知らせました．聖子イエス様は聖霊様に対して知らせたし，聖霊は聖子イエス様に対して知らせます．三位一体の教理は聖書に啓示された教理で人間の頭脳に思い出したのではないです．

次は，聖霊様が聖徒のためになさる仕事に関して聖書に啓示されたお言葉を通じてよく見ます．第一，聖霊はイエスキリストを信じる者等が神様の息子になったことを確信するようになさって神様を父と呼ぶようになさいます．第二，聖徒たちに神様の臨在を感じながら暮すようになさいます．第三，聖徒たちに神様のお言葉の意味が分かるように教えます．第四，聖徒たちが正しい決定と選択をするように導きます．五番目，聖徒を慰めます．六番目，私たちの弱さを手伝ってくれます．七番目，知恵のお言葉，知識のお言葉，霊たち分別する，信仰，病気のいやし，能力行い，予言，方言，方言通訳，仕え，教え，権威，救済，治め，哀れみの賜物をくださって教会を仕えるようになさいます．八番目，御霊の実である、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制の神霊な実を結ぶようにしてくださって聖徒らしい生の姿を取り揃えるようになさいます．
最後に，聖霊がなさる仕事を比喩と象徴に啓示したものなどを調べます．
第一，水で比喩しました．水が肉体の生命の維持に必須なことのように聖霊は人の霊的な生命に必須です．聖霊充満すれば生の意味と喜びに対する渇望が解消されます．水が私たちの身と生活を貞潔にさせるように聖霊は私たちの心と考えを貞潔にさせます．第二，火で比喩しました．火が燃える事のように聖霊で充満すれば不義して不正な考えが消滅して善良で義のあって真実の心を持つようになります．火が明るい光を供給するように聖霊が私たち心霊に光を照らしてくださって永生と天国の秘密が分かるようになさいます．火がエネルギーを供給するように聖霊で充満すれば私たちの心霊の中に神様に対する愛と福音伝播と奉仕に対する熱心の炎が燃えるようになって権能が現われるようになります．第三，風で比喩しました．望むことが地球上どの所にでも広がって存在し聖霊もどこにでもいらっしゃいます．審判の台風もなって，汚染して沈んだつけるのを新鮮に変えて置く風もなります．聖霊充満すればいつもその心霊の状態がさわやかで新鮮になります．以外にも鳩，雨，油，印，保証などがあります．
″御霊を消してはいけない.″この言葉は聖霊がなさる仕事にさからって行かない，聖霊の現われることと能力に対して拒否するなと言う意味です．積極的に聖霊様の教え，導き，慰め，助けることを慕って求めなければなりません．神霊な賜物と実を慕って求めなければなりません．聖霊の感動と感化と指示を注意深く察して従順しなければなりません．凡事に聖霊様を意識して行動して，聖霊様に助けを求めながら頼るのが聖霊様を認める適切な態度です．

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

貴重な神様の考え

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

人の行動は考えから始まります．その人の考えが分かれば彼がどんな行動をするようになるはずなのかを分かります．社会生活がお上手になるためには他人の考えを看破することができなければなりません．また自分の考えを正確に表現することができなければなりません．ところでこれよりもっと優先的なことがあります．神様の考えが分かることが急先務で一番重要な事です．神様の考えは神様が知らせてくれなければ人の能力ではわからないです．驚くべきことに神様が自分の考えを公開しました．人が必ず分からなければならないことに対する神様の考えを十分に知らせました．神様が作った万物と人類の歴史を通じて啓示なさいました．しかし自然界と人類歴史を通じて私たちが分からなければならない神様の考えを十分にわからないです．なおかつ人間の救いと死後の世界と歴史の終末に対する神様の考えはわからないです．私たちが神様をどんなに仕えなければならないはずなのかに対してもわからないです．
神様が私たちに聖書をくださいました．聖書は聖霊の感動を受けた人々が神様にもらって記録したのです．聖書は神様の言葉が記録された本です．聖書には神様の考えがふんだんで明確に啓示されています．エレミヤ書，29 章 11 節に記録されるのを **“主は言われる、わたしがあなたがたに対していだいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである。”** しました．神様の考えが分かってその考えを従って行えば救いを得るようになります．神様を正しく仕えるようになります．平安と所望を得るようになります．無限な幸せを享受するようになります．
先に，神様の考えが分かると神様をまことらしく仕えることができるという事実を調べます．神様の考えが分からないとか神様の考えを無視とは神様を仕えることができないです．もうその事実を聖書に記録された事件を通じてよく見ます．

第一、カインとアベルの祭祀に関する事件です．

神様は罪を犯したアダムに神様のあわれみを受けて神様の前に進むことができる道に対して啓示してくださいました．それはあがないの恵みに関したことです．アダムはこの息子であるカインとアベルに神様が受け入れる祭祀に対して伝えてくれました．アベルは神様の考えの通りそのまま受け入れました．そして将来いらっしゃる救世主を信じる信仰を持って羊の初子とその油でお供えを差し上げました．しかしカインは神様の考えを無視しました．救世主に対する信仰なしに地の所産でお供えをして祭祀を差し上げました．自分が思い出した方法でした．神様はアベルと彼のお供えは受けたがカインと彼のお供えは受けなかったです．カインが多様なお供えを祭壇に差し上げましたし熱心と真心をつくしたが　これは神様の前ではどんな意味がなかったです．カインが神様の考えどおりしなかったということが決定的な過ちでした．

第二、祭司長ナダブとアビフが神様の懲罰で死んだ事件です．

旧約時代には神様がモセを通じて律法をくださいました．その律法はモセの考えから出たのではないです．全面的に神様の考えから始まったのです．レビ記 16 章 12 節に見ると香炉を取ってエホバの前の祭壇の上の火を香炉に満たしなさいという規定が出ます．その火は人が立てた火ではなく神様頃から立てた火でした．この火は消えないように保存しなさいと神様が命じた火です．ところで祭司長ナダブとアビフが違う火でエホバの前に焚香してから火がエホバの前から出てきて彼らを燃えて彼らがその席で死にました．ナダブとアビフは祭壇の火も他の火や火の性能は同じだからどの火でもかまわないと思いました．しかし　この火とその火を区別することは人がするべきことではないです．神様がなさる仕事です．この事件が与える教訓を私たちが肝に銘じなければなりません．ナダブとアビフが違う火を差し上げたことは神様の考えを無視して自分の考えどおり行ったのです．人間の考えどおり神様を仕えようと思うことは無益で危ない事です．

第三、ベテシメシ人々が神様の懲罰で死んだ事件です．

イスラエルがペリシテとの戦争で惨敗に喫して神様の主の箱を奪われました．ペリシテ人々は神様の主の箱によって災いをたくさんあうようになると主の箱をイスラエルで返しました．(サムエル記上,6 章）主の箱が車に積まれてイスラエル地境に立ち入るとベテシメシ人々が主の箱が帰って来ることを見て好奇心を持って主の箱の中をのぞき見ました．すると神様の懲罰が臨んで多くの人が死にました．律法に神様の主の箱をのぞき見る者には死が宣告されていました．ベテシメシ人々はこの法を破ったから災いにあいました．

第四、アビナダブの息子ウザが死んだ事件です．

ダビデはエルサレムを王国の首都にした後ペリシテを征腹して政治的に安定を得るようになると民たちの信仰生活のために神様の主の箱を持って来て別に帳幕を作って安置しようと思いました．ところで主の箱を運ぶ途中に不祥事が起きました．車がナゴンの打作の庭先に至った時牛たちが走るとウザが主の箱に手を出してつかみました．その瞬間神様が震怒して打つのでウザがその席で死にました．主の箱運びにおいて根本的な過ちが現われました．主の箱はレビ支派の中にゴハッ子孫が主の箱の掛けがねに通されているまま肩に担いで運ぶようになっています．主の箱に手を出してはいけないです．それから三か月後にダビデは神様の法道どおり主の箱を運んでダビデ城に安置しました．主の箱運び途中起きた不祥事の教訓はこのようです．神様を仕えるには熱心だけ持ってからはだめです．善良な意図が無知な行実を政党化させてくれることができないです．神様を仕える方法は神様の考えどおりしなければなりません．

次は、神様の考えが分からなければ人間の宗教行為が偶像崇拝になるという事実をよく見ます．

ローマ人への手紙 1 章にこんなに記録されました．**“神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。彼らは神の真理を変えて虚偽とし、創造者の代りに被造物を拝み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アァメン。”（ローマ人への手紙 1:20～23,25)．**その宗教の歴史性と人類文化に及んだ影響と教理の倫理性と荘厳な意識そして多くの信徒の数が救いを保障するのではないです．聖書に啓示された創造主で救世主である神様，イエスキリストの神様を仕えない行為は神様の考えをさからって行くのです．神様が憎みするように思う偶像崇拝行為です．

次は、自分の考えで神様の考えを否定すればサタンの使嗾を受けることになるという事実をよく見ます．

イエス様は公生涯の終り頃に自分がエルサレムに上がって長老たちと大祭司長たちと書記官たちに多くの苦難を受けて殺されて三日ぶりに生き返えなければならないことをおっしゃいました．この瞬間ペテロがイエス様をつかんで“主よ，あまりそのようにいわないてください この事が決して主に及ばないです．”と引き止めました．するとイエス様は断固としていて力強い態度で “サタンよ，私の後に退きなさい お前は私を倒れるようにする者だ．あなたが神様の仕事を思わなくて返って人の仕事を 思うのだ．” とおっしゃいました．ペテロをサタンだと呼んだのではないです．ペテロが自分の考えでイエス様の考えを否定する行為はサタンの行為のようでサタンの道具の役をすることなのを指摘したのです．神様に従う人は神様の側に止まって思わなければなりません．人の側に止まって思えば　サタンの側に止まることになります．

終りに、皆さんの心が神様の考えで満たされるようにする方法をよく見ます．

１）神様の言葉をたくさん分からなければなりません．
神様の考えはおびただしい価値がある財宝です．聖書を通じて啓示された神様の考えにかなう考えをしなければなりません．そうするために聖書が分からなければなりません．
２）神様が行ったことを思い出さなければなりません．
聖書に記録された神様の行ったこと，先日皆さんに神様が行ったありがたいことを思い出してください．
３）神様の考えと相反した考えは容赦なく投げ捨てなければなりません．
神様の考えを受け入れれば考え方が卓越になります．そしてこのような考えが皆さんの心霊と肉体と生活にもたらす神様の恩寵を体験するようになります．

愛する皆さんはダビデのように **“神よ、あなたのもろもろのみ思いは、なんとわたしに尊いことでしょう。その全体はなんと広大なことでしょう。わたしがこれを数えようとすれば、その数は砂よりも多い。わたしが目ざめるとき、わたしはなおあなたと共にいます。”（詩篇，139:17,18)**という体験的な告白をなさってください．